光市立束荷小学校

# 学びをつなぎ、未来を拓く児童の育成

~ひと・もの・こととのかかわりを通し、自ら問い続ける学習~

# 1 研究の概要

# (1) 研修主題について

本校は、全校児童18名の小規模校である。幼少期から同じメンバーで過ごしているため、 児童同士の結び付きは強い。生活の中では、互いに遠慮なく自分の考えを伝えられるというよ さがある。学習の場面でも「リーダー学習」に馴染み、リーダーの進行に従って、意見を述べ たり、聞き手はそれをしっかりと聞いたりすることができる。そうしたかかわり合いの中で、 他者の意見に触れ、考えに広がりが見られるようになったものの、一人ひとりの考えが深まっ たかどうかについては課題が感じられる。そこで、昨年度の取組を踏まえながら、本年度も上 記の主題で研究を継続することにした。

学習の過程で、児童は様々な場面で問いをもつ。導入時に学習する対象と出会った際の「不思議だなあ。なぜそうなっているのか理由を知りたいなあ。」という学習材への問い。課題解決に向けた一人学びの場面での「この方法でいいかな?もっといい方法はないのかな?」という自分自身への問い。共学びの場面での仲間の考えへの問い。児童は問いに対する答えを見つけようと試行錯誤する。問うことをやめてしまうと、学びの浅い時点で得た未熟な考えしか表出できないが、問い続けることで考えは深まる。特に、共学びの場面では、自分の考えを述べただけで満足したり、仲間の考えを聞き流したりするのでなく、相手意識をもち、「自分や相手の考えをもっと発展させるためのヒントはないかな?」と問い続けることができれば、考えを深めることが可能になる。児童が問い続けることができるよう、一人ひとりの児童理解はもとより、発問、指示、声かけ、教具、場の設定等、東荷小の実態に即した授業のしかけを追究していきたいと考えた。

# (2) 本年度の研究について

本年度は、大和地域小中一貫教育推進協議会秋季研修会の会場校として、幼・小・中の10年余りの子どもの育ちを鑑み、強く丈夫で、それでいてしなやかな縦軸を中心にした学びを追求した。また、塩田小や東京都品川区の伊藤小等とも交流を重ね、他校の児童と協働が可能となるより広いフィールドの上での学びも同時に追求した。その研究は、副主題にも謳う通り、実際の「かかわり」を抜きにしては成し得ない。新型コロナウイルス感染防止の観点から、1年間その動向から目を離すことができなかった。そうした厳しい世情の中では、我々が求める学びの姿は、一見背反するもののようにもとれ、自問自答した。しかし、むしろこういう時だからこそ「かかわり」を軸にした温かく豊かな学習は、子どもたちには大切であるという手応えを感じた。ところが、いくら研究の意義深さが理解できても、感染拡大は我々の前の厚い壁となった。様々な制限の中にあろうともベストを尽くすために、本年度も本校は職員一丸となって授業実践を行った。授業者も、授業者以外の職員も、子どもたちの学びのためにまとまって「チーム東荷」となり、あらゆる教育活動

のベースとなった。それは、本年度に始まったことではなく、本校の美しい伝統のひとつである。 そして更に、本年度特筆すべきは「チーム東荷」を温かく支える地域のみなさんの力が温かく光 り、誰の心の中にも見事に輝いたことである。

少人数の学習では、ともすると自分の中だけで完結しがちであったり、発展性に欠いたりするといわれることがある。本年度は、各学年とも学習を地域素材に求め、学習したことを他校の児童・生徒に紹介することを経て、その素材の魅力を広く人々に発信できるように単元を構成した。更に、単元の中で身に付けた力が、生活や他の学習場面でも生きるものとするために、児童自らが素材に体当たりする場の設定、五感を通して素材が児童に強く印象づく仕掛けについても模索した。主体的なかかわりを通して、自ら問い続ける授業の工夫としては、それぞれの学年で次のような成果が見られた。

#### (3) 研究の実際

# ① 1・2年生 生活科「もっとすきになりたいなキラキラタウン」

1・2年では、地域のみなさんを交えての6月の熟議の段階から、本物とのかかわりの中で学習し続ける単元構成にすることや、一人ひとりの園児・児童に必ず出番が保証された授業作りをして、毎時間どの子ももれなく成長を可能にし、学びの見取りを丁寧に行っていくことを共通理解した。更に、単元が終了した時点で、どの子も自分の成長が感得できることが、学習のゴールのひとつであることを確認した。



【さつまいもの販売体験】

児童は、11月11日のさつまいも販売に向けて、東荷で収穫されたさつまいものおいしさをできるだけたくさんの人に分かりやすく伝える必要性を感じた。各家庭や地域に伝わるおいしい食べ方を聞き取り調査し、レシピにまとめ、レシピに間違いがないかどうか実際に調理してテストした。また、里の厨を見学し、商品の並べ方や人を惹きつけるポップのキャッチコピー等を学ぶことができた。園児・児童は、それらをそのまままねたのではなく、自分たちならではのアイディアを取り入れ、11月11日までお客さんに喜んでもらおうと一人ひとりの持ち味を生かしながらおいしい東荷のさつまいもの PR の方法を高め続けることができた。販売当日、園児・児童は協力して100kg弱の商品を完売することができた。

#### ② 3・4年生 総合的な学習の時間「受け継がれる束荷神舞」

3・4年では、塩田小の中学年とかかわりをもちながら、授業作りをした。本校児童が郷土の伝統文化東荷神舞の担い手であるように、塩田小児童も石城太鼓の担い手である。時代の潮流の中で、そのいずれも継承の難しさを感じる場面が見られるようになってきた。同じ悩みをかかえ、しかし何とか次世代につないでいこうとす



る児童にとって、お互いの存在は心強く感じられたようである。学【東荷ふれあい文化祭での発表】習を通し、児童は東荷神舞をたくさんの人々に広め、よさを味わってほしいと願うようになった。東荷ふれあい文化祭では、東荷神舞を手作りの劇に表した。自分たちの後輩となる年少者にも分かるようにするために、紙芝居を手作りし、雰囲気や3・4年生5名では演じきれない人物の表情等情報を補った。それをプロジェクターで拡大してジャンボ紙芝居にし、劇に併用するア

イディアは見事であった。

また、3・4年生は、年度当初から端末を用いてリモートで話し合い、意見交換を重ねた。画面を通してのびのびと自分の考えを話したり、アプリメタモジを活用して伝えたい情報を分かりやすく加工して提示したりすることができた。目的に応じた端末の活用力の実践を通しながら瞬く間に伸びて、低学年に教えられるまでになった。更に、小規模校の佐々並小ともリモートによる縁を得て、いろいろな教科の学習を展開できた。まるで教科書やノートを使うように、中学年の5人は端末を活用している。3年生の子どもたちが端末を初めて手にした頃、端末のアルファベットはおろか操作上の読み仮名の無い漢字も分からなかったに違いない。その子どもたちがマナーを守りながら正しく巧みにこれを活用できるようになるのに、指導者の努力や工夫はどれほどのものだっただろうか。それを感じ取っているからこそ、中学年の子どもたちは率先して低学年に教えているのだと考える。

# ③ 5・6年 総合的な学習の時間「伊藤公マイスターをめざそう」

5・6年は、郷土の偉人伊藤博文を中心にして東京都品川区の伊藤小及び光市内の塩田小、大和中学校とつながりをもち、授業展開した。事前のアンケートでは、伊藤博文の生家跡がある大和地域や、墓所にほど近い伊藤小学校の児童生徒にとっては比較的身近な偉人の一人として捉えられている伊藤博文であるが、それ以外の児童生徒には社会科の教科書で垣間見た程度で、今の社会との接点や彼の理念等についてはあまり詳しく知られていないという現実が浮き



【伊藤小とのリモート授業】

彫りになった。本校の5・6年生は、一人ひとりが伊藤博文の人物像に接近するために、フィールドワークを始めた。伊藤博文の足跡を求めて町を歩き、人を訪ね、体当たりで迫っていった。一旦彼に近づいた子どもたちは、次に俯瞰できる場所へと移った。そして、どのような伝え方をすればよりたくさんの人々が素顔の伊藤博文に興味を持つか、一生懸命考え合った。5・6年生の子どもたちの高まりは、その次の活動に示されたと思う。子どもたちは、再びフィールドに出て、伊藤博文ゆかりの地からあらゆる場所に向け、彼の人となりを発信できた。こうして身に付けた子どもたちの力は、この先の多様な場面での対応が期待できる。長いスパンの子どもたちの学習を見守り、寄り添い、支え続けた指導者の努力は、称賛に値すると感じている。成長した子どもたちが、どこかで誰かに伊藤博文について語る機会があるとしたら、きっと胸を張り、誇らしく語るだろう。その時子どもたちの心には、伊藤博文の姿だけでなく、もう一人の人物も浮かぶことだろう。

# ④ 5・6年 保健体育「病気の予防」

最後に、5・6年生体育科「病気の予防」(2 病原体と病気)の 学習では、今まさに子どもたちの周囲を席巻している感染症にもか かわる内容に踏み込んだ。それゆえ子どもたちの関心の高さは学習 の姿勢や発言・反応から見て取れたが、目に見えない小さなものが、 社会の様々な場面で大きな影響を及ぼしていることとの関連性を イメージすることについては、個人差があったと考えられる。自分



【手作り教具の工夫】

のこととして感染症の予防に積極的な6年生を中心とした子どもは、予防方法の知識もスキル

も学年相応であったと思われるが、うがい等を忘れて、時々促されることがある取組に対しやや他律的な5年生を中心とする子どもたちにとっては、本学習が意識向上のよいきっかけになればと期待された。全ての子どもたちを学習に惹きつけることができたのは、飛沫の飛ぶ距離がどの子にも具体的に分かるように工夫された手作りの教具を授業の前段で用いたことに起因すると思われる。また、言葉による指導の割合が多くなると、学習に対する不安が懸念される児童を、教具を扱う場面の補助者として指名し、誰にも出番がある全員参加の学習となった。これは、平素からの子どもたちとのかかわりの中で、指導者が一人ひとりの子どもを入念に観察し、それぞれの個性を深く理解し、どうすればそのよさを引き出して成長に結びつけられるかひたむきに考えた結果だと思う。「授業を通して、こんな姿になってほしい」という学習のゴールを一人ひとりにしつらえ、それに向かうためのチャートもまたカスタマイズされ、児童理解にたつことに徹した本授業は、東荷小ならではの魅力にあふれていた。

### 2 研究のまとめ

10月22日に行われた大和地域小中一貫教育推進協議会秋季研修大会における公開授業後の研究協議では、各授業に対して様々な意見が寄せられた。

幼・小・中との交流も、他の小学校との交流も、リモートを中心にしたとはいえ、直接交流も行った。 そうすることで、子どもたち同士の心の距離はぐっと近づいた。それゆえ、強い相手意識や連帯感が芽生えた。だが、直接交流には、経費や移動時間が不可欠である。学習を継続するのならば、この問題を解決するためのバックボーンも明示できるとよいのではないかという投げかけがあった。

また、交流学習には相手校との打合せが欠かせない。授業の開始時刻をそろえること、単元の進捗状況を確認すること等、その内容は多岐にわたる。それは、指導者の負担を増やさないか、という意見があった。小学校の授業時間は一般的には一時間45分である。中学校は50分が一般的だが、小・中が連携する場合、矛盾が起きない折り合いのつけ方はあるだろうか等の疑問もあった。幸い、大和地区4小学校では、同じ校時表を用いており、直接交流にしてもリモート交流にしても時間の調整は行いやすい。また、確かに小学校では一時間の授業は45分が多いが、学習内容によっては、15分を1モジュールとして、60分の学習を実施することもある。学習の展開の仕方を工夫し、計画的に単元を進めることで、中学校との無理のない交流が可能となるであろう。

#### 3 来年度に向けて

本年度、ICTを活用し、つながる力、まとめる力、伝える力を育てようと大きく一歩を踏み出すことができた。リモートでつながった相手について、同じ場所にいなくても思いを馳せることができるようになった。

来年度も、ICTを効果的に活用し、「かかわり」を大切にした学習を進め、児童の力を育成したいと考える。